

五輪に見る台湾ナショナリズム

この夏のパリ五輪の競技場で「台湾」はタブーになった

台湾独立建国連盟 日本本部 中央委員 林 省吾

令和6年10月号(314号)
(皇紀2684年) 毎月1日発行

新風

編集人 川畑賢一

発行人 魚谷哲央
年間購読料 2,000円

維新政党・新風本部
〒604-0934 京都市中京区麩屋町通二条下ル
第2ふじビル4階
TEL.075-708-3700 FAX.075-708-3800
<https://shimpu.jp.org/>
otayori@shimpu.jp.org



チャイニーズタイペイの由来と意味

よく誤解される点がある。チャイニーズタイペイといふ名称を使用するのは、台湾を名乗ることが許されないからといふ訳ではない。そもそも、チャイニーズタイペイといふ名称が初めて使われたのは、一九七九年に名古屋で開催された国際オリンピック委員会(IOC)の執行委員会である。一九七二年、アルバニア決議案で国連から追放された中華民国政権をIOC

中華民国の飛び火を受ける台湾

国台北」といふ中国ルーツを残した名前を選んだのも、台湾を殖民する中華民国のエゴでしかなかった。

といふ訳で、五輪の会場に持ち込むことができず、本来は中華民国関連のもののみ。例へば、よく「台湾の国旗」といふ誤った描写がなされる「青天白日满地紅旗」といふ中華民国国旗である。しかし、パリ五輪は中国最良のため、その慣例を拡大解釈し、今回は会場内には台湾の形を描いたポスター、漢字もしくは英語で台湾と書かれた応援グッズなど、台湾関連のものは全て持ち込み禁止となり、発見された場合は没収されることもあった。

台湾人自身の振る舞ひも矛盾だらけ

長年、中華民国に殖民されてきた台湾人には、自分を中華民国人だと認識する人が大勢ある。先述の通り、チャイニーズタイペイといふ名称で五輪に参加するため、今大会、台湾の選手が金メダルを勝ち取った際に、掲げるのは「チャイニーズタイペイオリンピック委員会旗」、会場に響くのは「チャイニーズタイペイオリンピック委員会歌」だった。実はこの歌は中華民国の「国旗歌」であり、台湾人は学校で歌はされてきた馴染みある歌である。今大会、台湾選手が二つの金メダルを獲得したため、この国旗歌は二度流され、中継を見た一部の台湾人から「感動した!」「涙が止まらない」といふ声が上がった。

原因はかつて台湾にあったジェノサイド

の矛盾を指摘すると、「何でもかんでも政治を持ち込むな!」と逆ギレされるのがオチだ。

そもそも、台湾といふ名の国は存在しない。今、台湾にある国家の名前は「中華民国」であり、一九一一年の辛亥革命で誕生した中国人が作った中国の国である。台湾人が作った国ではない。サンフランシスコ条約では日本は台湾の主権を放棄すると明記したのみであり、実は台湾主権の行方は未定のまま。戦後、中華民国は連合国の代表として台湾を管理する立場であるにもかかわらず、「台湾光復」と称し、勝手に台湾を私物化した。厳密に言ふと、今この時点で台湾は中華民国に不法占拠されてゐて、殖民されてゐる状態である。

民主化後、更に混乱するアイデンティティ

ジェノサイドの後遺症は実に長引いてゐる。今の台湾人はかつて自分の祖先が虐殺された事実を見て見ぬふりをし、中華民国に非常に寛大な対応を取つてゐる。といふよりも、自身が中華民国の国民だと信じ込んでゐる

新風驟雨

しんぶうしゅう
▼九月に入つても熱帯夜と猛暑が続いてをり、加へて各地でゲリラ豪雨も発生してゐる。国際的にも明らかに異常気象と言つても過言ではないが、世の識者はそれらを地球温暖化の為せるものであると断言し、世界をあげて脱炭素(二酸化炭素の排出を極限まで削減)に狂騒してゐる。▼しかし温暖化は事実であるとしても(冷却化してゐるとの説もある)、その原因が二酸化炭素とも言へない専門家の研究が世界的に注目されてゐる様である。そのひとつに、二年前にトンガ沖で発生した今世紀最大規模の海底火山の噴火が、大量の水蒸気を大気に放ち、その大気中の水蒸気が太陽放射熱を吸収して熱として地面に再放出してゐる結果ださうである。

▼亦、太陽からの磁気エネルギーが地球の雲の量をコントロールしてゐることも作用の一因でもあるさうである。▼大気中の二酸化炭素の増加は地球を著しく緑化させてをり、温暖化による地球の砂漠化は事実には反した見解であるさうだ。いづれにせよ、脱炭素思潮に対する政治的・経済的思惑ではない客観的・冷静なる論議が必要ではないか。(百)

本紙目次

- 一頁: 五輪に見る台湾ナショナリズム
- 二頁: 党声明他